



ワールド・シアター・デイ 2018

ある日

一人の人間が鏡（観客）の前で自らに問いかけることにした  
そして同じ鏡（彼の観客）の前で問いに対する答えを生み出し  
自らを批評し、自らの問いと答えを茶化し  
笑ったり泣いたりし、ともかく最後には  
眼前の鏡（彼の観客）に挨拶することにした  
緊張と安らぎのひとときを与えられたことに  
頭を下げ、相手に感謝と敬意を示した……  
心の奥底で、彼は平和を求めている  
自らと、そして彼の鏡との平和な関係を  
彼は演劇を実践していた……

その日、彼は喋っていた……  
自分の欠点、矛盾点や歪んだ部分は無視して  
物まねや大げさな身ぶりで  
人間としての自分の心の狭さや  
大事を招く狡猾さを激しく非難した  
彼は自分に対して喋っていた……  
押し寄せる高揚感のなかで、自らをたたえた  
自分自身の思考から生み出し  
自らの手で作り出せたであろう偉大さや美しさ、  
より良い存在やより良い世界を求めて  
たとえ相手が鏡に映る自分でも、彼は望みを語った  
自分と鏡の望みが同じであれば……  
だが彼は、自分がやっているのは  
滑稽なこと、幻想にすぎないとわかっている  
しかしこれは同時に精神的な行為で  
世界を構築し、再創造することでもあった  
彼は演劇を実践していた……

責め立てるような言葉と身ぶりで  
あらゆる希望を打ち砕きながらも  
彼は信じさせようと必死だった  
すべてはこの一夜に成し遂げられる、と  
狂った視線と  
甘い言葉と  
いたずらっぽい笑顔と  
豊かなユーモアと  
傷つけたり揺さぶったりしながらも  
奇跡の手術を成し遂げる言葉で  
そう、彼は演劇を実践していた……

一般的に

故郷アフリカでは  
とくに私の出身地であるカミテ (1) では  
誰も何も気にしない  
笑いながら涙を流して悼み  
失望すれば地面を踏み鳴らし  
グベグベ (2) やビクーツィ (3) を踊る  
グラエ (4) 、ワベレ (5) 、ポニウゴ (6) など  
恐ろしい形相のマスクを彫り  
私たちに周期と時間を押し付ける  
絶対的な力を形にする  
そして操り人形は私たちのように  
最後には創造者を象<sup>かたちづく</sup>り  
遣い手を意のままに操って  
儀式が生まれる  
発せられた言葉はリズムカルな歌や呼吸で膨れ上がり  
聖なるものを求めて突き進み  
トランスのようなダンスを促し  
呪文と祈りの呼びかけが起こる  
しかし何よりも、笑いが巻き起こり  
生きる喜びがたたえられる

何世紀にもわたる奴隷制と植民地支配も  
人種主義も差別も  
長年にわたる忌まわしき残虐行為も  
私たち人類の父と母の魂から  
消し去り奪うことのできなかつた喜びが  
アフリカでも、世界中のあらゆる場所と同様に  
私たちは演劇を実践している……

ITIにとって特別な年である今年  
私たちの大陸を代表し  
私たちの平和のメッセージを  
演劇の平和のメッセージを伝えられることは  
この上なく幸せで光栄なこと  
なぜなら少し前までは、人々は  
みじんの危機感も欠落感も感じることなく  
この大陸のことなどどうでもいいと言ったものだが  
今再び、アフリカは人類の父と母としての  
その根源的な役割が認識され  
全世界が押し寄せているのだから……  
それは、人が皆、両親の腕のなかに  
平和を見出したいと願っているからではないか？

かくして、アフリカの演劇はこれまで以上に  
あらゆる人々を惹きつけ、結びつけている  
なかでも思想、言葉、そして演劇的行為を共有し、  
自分自身そしてお互いを尊重しあう人々を  
人間主義的な価値観を最優先することで  
人々のうちに、知性と理解をもたらす  
より優れた人間性を取り戻すことを願って  
人間の文化のなかでもとくに効果的な手段  
あらゆる境界線を消し去る「演劇」を活用して……  
あらゆる言語で語られ、あらゆる文明が関わり、  
あらゆる理想を反映する演劇は包容力のある手段であり  
人々が本当のところはひとつであることを表現する

あまたの対立にもかかわらず  
人々はお互いをより深く知ろうとし  
平和と平穩のなかで、互いをより愛したいのだ  
表現が参加するものになるとき  
私たちはこの行為が私たちに課す責任を思い出す  
人を再び人にとっての最大の財産とするために  
知識を増やし、無知を減らし  
彼らを共に笑わせ、涙させる演劇の力を思い出す

私たちの演劇は、あらゆる人間主義的な原則、  
高い美徳、そして UNESCO が熱心に唄導する  
諸国民間の平和と友情という考え方について  
もう一度根本的に見直し、新たな価値を与えようとしている  
私たちの創造の場で再び命を吹き込み  
こうした概念や原則が、まずは演劇の担い手たちにとって  
なくてはならない、深い考察を促すものとなり  
この考えを観客とより一層分かち合えるように

だから私たちの新作『木の神 (L' Arbre Dieu) 』では  
私たちの師、キングダック (7) のンゴ・ビヨン・ビ・クバン (8)  
が何度もこう教える

「神とは大きな木のようなものだ」  
私たちにいつときに見えるのは  
自分がいる場所の角度によりその一部に過ぎない  
木を飛び越える者には葉だけが見え  
場合によっては果物と季節ごとに咲く花だけが見える  
地下に暮らす者は根について多くを知るだろう  
木にもたれかかる者は  
背中に伝わる感覚を通じて木を認識する  
ある方角から来る者は  
反対側にいる者に見えるとは限らない側面を見るだろう  
恵まれた者は、樹皮と果肉の間の秘密を理解し  
木の髓の仕組みを理解するだろう  
しかし、それぞれの知覚がいかに表層的だろうと

いかに深遠であろうと  
すべての側面を同時に認識できる場所に  
立った者は、いまだかつていない  
自身がこの神聖なる木にならない限りは！  
だがそのとき私たちは人でいられるのだろうか？

世界中の演劇がお互いを許容し、受け入れ  
ITIのグローバルな目標に貢献し  
記念すべき70周年の年に  
演劇の力強い存在により  
世界がより平和になることを願って……

(1) カミテ：「黒人の土地」、すなわち「アフリカ」を意味するカミタに暮らす者。カミテはまた、あらゆる先住民と、ディアスポラによって世界各地に散らばった彼らの子孫、そしてこの地域発祥の宗教を信仰する者を指す。

(2) グベグベ：コートジボワールのベティ族の地域に伝わる伝統舞踊。喜びや悲しみを公に表現する際に踊られる。ベティのあらゆる村で踊られ、コートジボワールの中西部を越える広がりを見せている。

(3) ビクーツィ：BikoutsiのKoutは「打つ」、Siは「大地」の意。南カメルーン発祥のファン族、ベティ族の踊り。もともとは豊作や穏やかな天候など、母なる大地の恵みを祈願する女性の踊りで、大地に耳を傾けてもらうため、地面を勢いよく踏みならす必要があった。現在、多くの国際的なスターのおかげで復活し、地域の若者の間で広まっている。

(4) グラエ：コートジボワール西部に暮らすウェ族およびウォベ族の「マスク」に基づく宗教体系。しばしば恐ろしい形相をした一連のマスクが、彼らの信仰と社会組織の礎をなす。

(5) ワベレ：コートジボワール北部のセヌフォと呼ばれる宗教体系におけるマスクのひとつ。火を吐くハイエナの頭を象った知識と権力の象徴。

(6) ポニウゴ：セヌフォのマスクのひとつ。聖なる木立の中央で行われ、彼らの社会全体を支配する儀式「ボロ」に使われる。

(7) キングック：「助言する女性」の意で、女家長に与えられる敬称。カメルーン中央部バッサ族の地域の宗教体系、ムボック（またはムボグ）の秘儀を伝授され、一定レベルの知恵を獲得した女性のこと。男性に使われる敬称ムボンボックと対になる言葉。

(8) ンゴ・ビヨン・ビ・クバン：ビヨンの娘、クバンの息子。リキンの祖母で、「キ=イ・ムボック」の知恵を持つ最後の人々の一人。リキンは祖母にキ=イ・ムボックの知恵を伝授され、後世へ継承する活動を30年以上にわたり続けている。

## Wèrè Wèrè Liking

### ウエレウエレ・リキン（マルチアーティスト）

1950年カメルーン・ボンデ生まれ。78年よりコートジボワールに住む。小説、戯曲、随筆、美術書、詩を書き、68年以降は画家としても活動。演劇では劇作家、操り人形師、俳優、「フレスコオペラ」（アフリカ独自の絵画や仮面を使ったもので「アフリカオペラ」とも呼ばれる）の演出家として活動。ラッパーでもある。

アビジャン大学の研究者として儀礼劇の改革に参加し、85年にアーティストコロニー「キ=イ・ムボック」を創設。アフリカの通過儀礼から発案したトレーニング法で生活に困難を抱える若者の社会復帰を促し、クラウド王子賞「街のヒーロー」賞を受賞した。2001年には「若者の訓練と文化の発展のための汎アフリカキ=イ基金」を設立した。

アレッティ賞、ルネ・ブライユ賞、アルバータ大学フォンロン・ニコルズ賞、芸術文化勲章シュヴァリエなど受賞多数。小説『切断された記憶（La mémoire amputée）』ではコートジボワール国家功労勲章、野間アフリカ出版賞（2005年）を受ける。フランス語高等評議会メンバー（1997～2003年）。現在、コートジボワールの「アフリカおよびアフリカディアスポラの科学、芸術および文化アカデミー」常任理事。

1992年の東京国際芸術祭では、リキン脚本・演出によるキ=イ・ムボック・シアター『トゥアレグ族の男とピグミー族の女の結婚』が上演された。

翻訳：志村未帆

Translation: Miho SHIMURA